

# 近代八戸地域の教育機関において導入された洋学教育 —その背景と波及効果についての考察

岩見 一郎<sup>1</sup>

## 要 旨

本論では、近代八戸地域の教育機関に導入された洋学の歴史的な背景を振り返り、その波及効果について考察する。具体的には、蛇口胤親と岩泉正意という二人の先駆者の取り組みに注目する。明治初期に廃藩置県により社会制度が大きく変化する中で、彼らは八戸の中心地に開文学舎という夜学を創立する。この教育上の取り組みの歴史的な重要性の一つは、洋学の導入であり、その中には旧百石村（現三沢市）谷地頭の洋式牧場に雇われていた英国人による異文化遭遇・接触の機会も含む、開文学舎で学んだ若者の中から、その後、政治、教育、宗教等の分野で活躍し、地域発展に貢献した者たちが輩出されている。この夜学の足跡は、今後の地域発展のために過去から学ぶべき注目に値する事例となり得る。

**キーワード：**異文化との遭遇・接触，洋学，近代，八戸地域，夜学

---

<sup>1</sup> 感性デザイン学科・基礎教育研究センター・教授

# The Historical Background and Outcomes of Western Scholarship Introduced at an Educational Facility in the Hachinohe Area during the Modern Period

Ichiro IWAMI

## ABSTRACT

This paper discusses the historical background and outcomes of Western scholarship introduced at an educational facility in the Hachinohe area during the modern period. The thesis of the work focuses on local frontrunners named Hebiguchi Tanechika and Iwaizumi Seii. Both men came from the Hachinohe Clan and founded a private night school called Kaibungakusha, in the downtown section of the Hachinohe area. The changes occurred during the early Meiji Period, when the Japanese social system was drastically changing because of the establishment of prefectures in place of feudal domains. One of the historical significances of this educational endeavor was the introduction of Western scholarship by the frontrunners, including a cross-cultural encounter-and-contact incident provided by an Englishman hired at a Western-style ranch in Yachigashira, the old Momoishi Village (present-day Misawa City). It was found that some young people who studied at this night school later contributed to the development of the Hachinohe area in politics, education, religion and so forth. Kaibungakusha's footprint could be regarded as a noteworthy case for us to learn from the past to better our future in this region.

**Key Words:** *cross-cultural encounter and contact, Western scholarship, modern period, Hachinohe area, night school*

## 1. はじめに

本論では、近代、特に明治初期に、青森県八戸地域の教育機関において導入された洋学教育に焦点を当て、その歴史的背景と波及効果について地域の産業遺産と関連づけて考察する。大沢(2001)は、産業遺産とは、過去の産業活動の痕跡を示す遺産・遺構・遺物の総称であると定義され、それらの研究は、究極的には人間一技術者、職人などーそのものの探究を目的としているかも知れないと記している(p.171)。また木村(2001)は、明治初期、工部省工学寮の山尾庸三が「工業なくも人をつくれば、その人工業を見出すべし」と、工業産業の原点に触れ、人材育成の重要性を力説していることを紹介し、「いまやまさに、人間教育、工学倫理教育、諸教養の学習意義を深め、地球家族の理念に立ち返る時代というべき」と述べている(p.5)。新たな考え方、新たな営みは、全く無の状態から突如現われるものではなく、その土地・土壌で培われた風土、文化、過去の歴史等を基盤として生み出される。青少年教育における人材育成という考え方は、近代八戸地域の教育機関における洋学教育に見出すことができるだろうか。そしてそこで薫陶を受けた若者たちにはどのような影響がもたらされたのだろうか。近代八戸地域における青少年教育を洋学教育という視点から振り返ることは、地域文化の歴史、産業遺産を知る上で重要な切り口となり、地域理解を深めることに繋がり得る。

## 2. 近代八戸地域の歴史的背景について

ここでは、近代八戸地域の歴史的な背景について概観する。まず八戸藩は、1664(寛文4)年、盛岡藩10万石から、2万石を分与されて創設される。1666(寛文6)年には南部直房が初代藩主に就任し、八戸城が築かれ、八戸藩が始まる。八戸藩の領地は現在の八戸市の領域とはかなりの違いがあり、現在の岩手県久慈市まで含まれた。1839(天保10)年に薩摩藩主島津重豪の子信順が八戸藩主に就任する。そして八戸藩は1868(慶應4)年に奥羽越列藩同盟に署名し、盛岡藩と共に、野辺地で弘前藩と戦い勝利するが、新政府軍へは降伏する。1871(明治4)、廃藩置県で弘前県が誕生し、同年に青森県と改称し、県庁を青森町(現青森市)に移す。1876(明治9)年にはハリストス正教会陸奥国八戸光栄会が設立される。この時期、県内の地租改正が完了し、旧藩主・藩士の土地領有権は否定され、土地所有者や地価が決められる。また八戸町に養蚕伝習所開設され、八戸共商會が設立され、鮫築港の推進体となる。さらに自由民権政社「暢伸社」<sup>ちやうしんしゃ</sup>が設立される。そして1881(明治14)年には、お雇いオランダ人ムルデルによって鮫港が調査される。また1890(明治23)年には、町村制施行により、三戸郡八戸町が旧八戸城下と柏崎村の区域を基盤として誕生する。1901(明治34)年には長者村と合併し、1929(昭和4)年には小中野町、湊町、鮫村と合併し、八戸市が誕生する。

## 3. 近代八戸地域における教育機関の設立について

幕末には、藩政の行き詰まり状態を打開しようとする取り組みが一部士族により行われた。八戸

地域では、例えば、水利開発の先駆者である八戸藩士蛇口伴蔵(胤年)が、蒼前平の開墾を1857(安政4)から始め、1860(万延元)年には一部の水堰を完成した。伴蔵は領内五ヵ所(①板橋、類家(現八戸市)、②虎渡、剣吉(現南部町)、③大杉平、糠塚(現八戸市)、④蒼前平(現八戸市～階上町)、⑤小軽米(現岩手県軽米町))の開発を計画していたという。開発資金は、商売で築いた私財を投じ、土地開墾の技術指導には三本木開拓に携わった新渡戸十次郎を迎えた。上水事業に着手し、③八戸市大杉平、糠塚、④蒼前平の開田を果たしたが、伴蔵の事業は完成されなかった。この地域で、水田開発が飛躍的に増加するのはポンプアップの技術が進歩し、馬淵川や新井田川から直接揚水できるようになった大正時代以降だった。中野渡(2017)は「私財を投げ打って公共の事業を行った、先駆者としての伴蔵の役割は評価されている」と論じているが、この伴蔵の利他的精神は、子の胤親(兼吉)に別の形で受け継がれる。

1873(明治6)年、蛇口胤親は、文明開化時代に対応するために、番町にある自宅を開放し、八戸藩士だった岩泉正意と共に、夜学開文学舎を創立した(本田, 1988)。生徒は14歳以上の男子35名とある。ここでは、旧百石村(現三沢市)谷地頭で旧斗南藩士広沢安任が洋式牧場開牧社に雇い入れた英語ネイティブ英学教授ルセーを招いて、八戸の青少年に科学ロマンを啓蒙した(本田, 2001)。また1876(明治9)年、県内での公立中学校誕生に先駆けて、教員養成を目的とする青森師範学校が弘前に開校されているが、この八戸分校が1877(明治10)年に胤親宅を校舎として開校される。そこで学んだ若者の中からこの地域における自由民権政社「暢伸社」の中心メンバーとして、明治中期に活躍する人びとが輩出される。幕末期から明治初期にかけて盛岡の日新堂や東京の大学南校(東京大学の前身の一つ)に派遣された渡邊知三郎(馬淵)は、従弟にあたる胤親について次のように記している。

又廃藩以来、旧官覺撤去せられて、未だ之に代るの学問所なし。胤親、之を慨く。八年自宅の本屋<sup>ほんおく</sup>を<sup>あげ</sup>擧て、私立の学校となし、官許を得て、之を開文社と命じ、自ら社主となり。自費を以て育英の教学に従事す。尋て十年青森縣師範学校の分校を八戸に設置するに至り、縣令へ願書を提出せり。(渡邊知三郎、蛇口胤親事蹟)

一方、開文学舎設立のもう一人の立役者岩泉正意とはどのような人物だったのか。彼は1824(天保12)年、八戸藩勘定方岩泉和五郎の長男として生まれた。1852(嘉永5)年、家督を相続し、勘定方見習いとして仕官し、真法恵賢流和算の最後の伝承者として算術師範を務めた。1865(慶応元)年に志和代官下役として志和に赴き、翌1866(慶応2)年に蛇口伴蔵の後援により、渡邊知三郎と共に、洋学(採鉱冶金学)修得のため盛岡藩の日新堂に留学した(本田, 1996)。しかし、戊辰戦争勃発により留学は打ち切られ、岩泉は1868(慶応4)年奥羽越列藩同盟への使者として仙台へ出役した。1869(明治2)年には下級武士でありながら要職に任命され、明治維新期の八戸藩政に携わった。一方、1870(明治3)年藩校で初めての洋学寮長を命じられ、廃藩置県後の1873(明治6)年には、開文学舎に関わり、八戸の進歩的教育に貢献した。1875(明治8)年以降、青森県第九大学区長、第十七中学区取締、八戸分病院院長などを歴任する。さらに1882(明治15)年には初代三戸郡長に就任するが、産馬騒擾事件で県令と地方農民の板挟みとなり、翌1883(明治16)年には一切の官職から身を引いた。その後、上徒士町の自宅に岩泉学問所を設け、教育や法律について市井の教育に当たった。

#### 4. 近代八戸地域における教育機関における洋学教育について

八戸市史編纂委員会は『新編八戸市史通史編Ⅲ近現代』（2014）で、歴史的「事象の背後にはそれを行う人物がいる。事象の羅列だけで人物は見えない歴史は面白くないし、人物はその時代の精神を受け継いで生きている」と論じている。そして八戸地域のいくつかの分野の人物相互のかかわりや系譜に視点をおき、「そこには外来者である「風の人」と元々の住人であった「土の人」とのコラボレーション（共同・協力）を垣間見ることができる」（p.67）と記している。ここでは近代八戸地域における教育機関に導入された洋学教育について、八戸近代の産業遺産と関連づけて考察していきたい。

大政奉還、王政復古、そして奥羽越列藩同盟成立という状況の下で、藩主の身の回りや生活の補佐役を長く勤めていた船越寛が、1868（慶応4）年に人材養成、軍制の洋式強化、奇兵、屯田兵などの創設による防衛と財政の基盤強化の三点を建議した。人材養成については、それまで八戸藩になかった洋学、すわなち、西洋の科学技術を教授する学校の開設、教師の招聘、留学生の派遣、開校と維持の費用捻出などを具体的に提言している。この実現によって、八戸藩洋学校は「幼童必読英学階梯」という教科書が編纂されるが、これは全国でも稀有なことだった（巻頭言、八戸地域誌第43号, p.1, 2006）。そして前述のとおり、1873（明治6）年には、蛇口胤親が岩泉正意とともに洋学校・開文学舎を創設し、八戸の進歩的教育に貢献した。

また、洋学教育と関連することであるが、1874（明治7）年ごろから八戸地域に入ってきたギリシヤ正教について、開明的立場にあった区長の岩泉正意はその弾圧を解き、教会設立を認めている。さらに1879（明治12）年には初の県会議員選挙に当選し、県議会が開かれたとき県令から西洋事情の講義を望まれ、岩泉はJ.S.ミルの「代議政体論」を解説している。近代八戸地域で最初の自由主義の啓蒙家として活動した岩泉正意の存在は大きい。

#### 5. 八戸の洋学教育と谷地頭「開牧社」との接点について

ここでは八戸の洋学教育と民間洋式牧場「開牧社」と接点について考察する。1872（明治5）年、旧百石村（現三沢市）谷地頭に日本初の民間洋式牧場「開牧社」（後の広沢（廣澤）牧場）が開設された。その中心となったのが、斗南藩で少参事として活躍していた広沢（廣澤）安任であった。広沢は元々会津藩士で、1862（文久2）年に藩主・松平容保が政情不安定な京都を鎮護するために幕府から京都守護職に命ぜられた際に側近として上洛するなど、藩の要職を務めた人物である。会津藩は、その後、幕末の動乱に巻き込まれ、戊辰戦争では倒幕派に敗れて朝敵・逆賊とされ、苦難の道を歩む。そして敗戦後、旧会津藩が移封されたのが陸奥国北郡（下北地方と上北の一部）、三戸郡（三戸・五戸地区）、二戸郡の一部（二戸市金田一以北）である。広沢は、会津藩再興を願い、陸奥国への移住を推進し、1869（明治2）年には斗南藩が成立する。そして1871（明治4）年、廃藩置県の詔が全国に発せられ、藩制の廃絶によって斗南藩は斗南県となり、会津藩再興の夢も絶たれてしまう。こうした政治的変革の中、旧斗南藩小参事だった広沢は、旧八戸藩大参事の太田広城とともに、津軽、南部に誕生していた複数の県を合併した弘前県（後の青森県）の成立に尽力する。そして翌1872（明治5）年には、旧百石村谷地頭に「開牧社」を開設し、肉牛の飼育に取り組む。

牧場開設は、一つには、旧藩士たちの授産・生活安定のためであり、肉牛飼育は、将来、牛肉や牛乳が日本人の食生活に欠かせないものになるとの判断からだったと言われる。ところで、谷地頭の洋式牧場には二人の英国人が雇われていた。二人のうち、マキノンは、生まれながらの農夫であり、日本語は判らず色々な職業に従事して特に牧夫として三ヵ国を巡り歩き、日本に来る直前、オーストラリアで12年の経験を積んだベテランであった。一方、ルセーは、谷地頭に来る前は、越前藩で通訳などをした人物である。彼は「書生より身を起こし、学問もでき、越前藩に雇われた時は金二百円の月給取りであった。英語に和訳を加えて教授する人は当時少ないと云われていた。それゆえに至る所で先生と呼ばれ、その交際もこれに準じていた」(同 p.84)とある。筆者は、山下(1995)から、ルセーが谷地頭から東京大学の前身である大学南校で教鞭を執っていた米国人グリフィス(二人は以前、福井藩の洋学校に雇われた元同僚同士)に宛てた英文手紙がグリフィスの母校、米国ニュージャージー州にあるラトガース大学の図書館に残っていることを知り、そのコピーを取り寄せてみた。手紙には、蛇口胤親はルセーに八戸で学校を開校してみないかと依頼された旨のことが記されていた。So much for the people. Now a little regarding myself. In my first to you; posted at Hachinohe, nearly 2 months ago, I mentioned an energetic man named Hebiguchi who wanted me to start a school at Hachinohe. (試訳「人のことはこれくらいにして、今度は自分のことを少し。二ヵ月ほど前、八戸で投函した貴兄への最初の手紙で、蛇口という名の活動的な男のことを述べましたが、彼は私に学校を始めてほしいと思っていました」)。島守(1996)は、蛇口胤親の開文学舎がルセーとマキノンを招き、進歩的な思想や海外事情の講義をさせていると記しているが、マキノンが八戸の若者たちに洋学を教授したか否かは確認できていない。一方、ルセーが八戸の若者にどれくらいの期間、具体的にどのような教授を行ったのか定かではない。一つはっきりしていることは、ルセーが元同僚のグリフィスに送った手紙の日付は1872(明治5)年12月29日であり、その時点で既に蛇口胤親から学校開設の依頼を受けていたことである。一方、廣澤安正著『活人劔、活人農：会津・斗南人の精神に生きる』(2009)には、ルセーとマキノンの仲たがいについて以下のように記してある。

『開牧五年紀事』には開牧時始めからルセーとマキノンは仲が悪く殴り合いに及ぶ喧嘩もしばしばあったことが記してあるが、開牧四年目「ルセーとマキノンの仲は常に合わず、積もり積もって更に陰悪となり、ルセーは一緒に仕事をしたくないとまで云った。そして自分から一歩退いてマキノンと顔を合わせまいと避けるようになった。八戸へ行って、蛇口氏より種々な内職を世話してもらったり、学校設立の話し合いもあったと云う。何故か皆成功しなかった」と記してある。(p. 108)

さらに廣澤は星亮一著『会津藩斗南へー誇り高き魂の軌跡』(2017)を引用して、二人の英国人の仲たがいの結末について以下のように記してある。

明治8年4月、ルセーが谷地頭を去った。マキノンの日本語が上達した結果、ルセーの影がうすくなった。また牧場が飛躍的に発展するまでに至らず、前途を悲観したこともあった。後で分かったのだが、ルセーの夢はこの地に学校を開くことで、函館の商人ブラキストンに相談を持ちかけていた。外国人の経営する学校は、東京の明治学院、横浜のフェリス女学院などいくつかあったが、この周辺では、生徒を集めることは難しい。併せて資金のメドも立たず、契約を一年残したままの退職だった。(p. 110)

ルセーが開牧社を退職して谷地頭を去ったのは1875（明治8）年4月のことである。一方、八戸に開文学舎が開校したのも1873（明治6）年のことであり、ルセーは約2年間洋学指導に携わったものと推察できる。テレビ・ラジオもネットもなかった時代に、西洋思想や海外事情を英国人から直接教授された当時の八戸の若者たちが大きな衝撃を受けたことは、想像するに難くない。

## 6. 八戸の洋学教育と盛岡「日新堂」との接点について

ルセーとは別に、八戸地域随一の洋学者である岩泉正意が開文学舎で洋学を教授した若者たちが影響をされた可能性も否定できない。彼は1866（慶應2）年に八戸から盛岡の日新堂に留学し、総督であった大島高任<sup>たかとう</sup>から英語、物理、化学、博学、応用科学を学んだと言われる（本田,1996, 岩泉正基,2007）。

ここでは日新堂とはどのような教育機関だったのかを記し、八戸開文学舎での洋学教育との接点について考察する。日新堂設立の中心人物の一人大島は、当初医師を志して江戸で蘭学を学んだが、次の長崎遊学では西洋の兵学・砲術、採鉱・製鉄などを学んだ。盛岡に帰ると1851（嘉永4）年、鉄砲方を仰せつけられた。1853（嘉永6）年の黒船来航により天下が騒然となる中、大島は鉄製大砲を製作して幕府に献上しようとした水戸藩に雇い入れられることとなった。鉄製大砲の鑄造には良質の鉄材が必要だとして、盛岡藩内の大橋鉄山に洋式高炉を築き、1857（安政4）年、日本初の溶鉱炉による製鉄に成功した。そして盛岡へ帰った大島は、洋学校を設立し、鉱山技術者を養成しようと考えた。一方、もう一人の中心人物八角高遠<sup>やすみたかとお</sup>は、京都で蘭方医学を学んだ後、1848（弘化5）年に盛岡に戻って藩医となった。やがて奥医師となり盛岡藩内における西洋医学の第一人者となった。1855（安政2）年に藩校名義堂の医学助教に任命されたが、西洋医学書の講義を発端として、漢方医学の教官らの排斥にあって辞職し、新しい洋学校を起こして西洋医学を伝授する決意を固めた。こうして二人の洋学先駆者が手を組み、洋学校設立に向けて動き出し、1861（文久3）年、14代藩主南部利剛<sup>としひさ</sup>から許可を得た。日新堂は盟約の同士によって経営された私学校で、洋書読法、医学本草、砲術、精錬工作を主軸に据え、英書によって化学・物理学・物産学の諸学科を、蘭書によって医学を学ばせた。だが、開校から5年後の1868（慶應4）年、盛岡藩は戊辰戦争に巻き込まれ、日新堂も閉鎖に追い込まれた。

岩泉正意の盛岡留学は、戊辰戦争勃発のため、ほぼ2年間の短期間で終わったが、戊辰の役中に奥羽列藩同盟との連絡のために仙台に出役の機会を得ている。仙台にはこの同盟推進に大きな役割を果たした仙台藩の英才玉蟲佐太右がいた。彼は幕府の日米通商条約の批准のための遣米使節の一人として米国に渡り、さらに世界一周し、斬新な視点で世のあり方を考えていた。正意は仙台出役中に玉蟲と接触する機会があったか、この考えを耳にした可能性があり、それが日新堂への留学と共に、正意の以後の考え方に影響を与えた可能性も考えられる。さらに政治の場であって、開明的立場にあった正意は、ギリシャ正教の弾圧を解き教会の設立を認め、1885（明治12）年初の県会議員選挙に当選し、第一回通常県会開催に際し、J.S.ミルの「代議政体論」の解説を行っているが、これらは日新堂で受けた洋学教育、グローバルな経験を有する者との接触の影響が大きかったことを物語っている。

## 7. 八戸の洋学教育と弘前東奥義塾との関連性についての考察

島守著の『母校賛歌 八戸高校物語』(1996)には次のような記載がある。

岩泉正意の開文学舎は、弘前の東奥義塾に対抗して設立されたもので、三沢の広沢牧場の英人ルセーやマキノンらも招き、進歩的な思想や海外事情の講義をさせている。(p.15)

弘前の東奥義塾は長い歴史を持つ教育機関であるが、どのようにして設立され、また開文学舎を含め八戸地域の教育機関と関りはなかったのだろうか。津軽藩には、元々稽古館という、9代藩主寧親<sup>やす</sup>が1794(寛政6)年に設けた藩校があった。この稽古館は、1872年(明治5年)5月、弘前漢英学校へ引き継がれるが、同年8月の学校制度改革により廃止となり、その後旧藩主である津軽承昭<sup>つぐあきら</sup>による財政的援助のもと、藩校出身の菊池九郎が創立者となり、同年11月、私立学校東奥義塾が創設された。1873(明治6)年には本多庸一が初代塾長となり、東北地方で初の米国人英語教師チャールズ・ウォルフが就任する。1874年(明治7年)には、菊池の要請でジョン・イングが英語教師として就任する。そして1877年(明治10年)にはイングの母校である米国インディアナ・アズベリー大学に塾生5名が留学する。

その後、基督教伝道による宣教効果が上がるにつれ、また、本多塾長などによる自由民権運動が活発化するにつれて、風あたりが強くなり、1882年(明治15年)末には旧藩主からの財政支援も途絶えることとなった。財政難から1901年(明治34年)3月末、弘前市へ移管されたものの、1910年(明治43年)、県立工業学校(現・青森県立弘前工業高等学校)の弘前設置と引き替えに廃校することとなり、県へ移管することとなった。県立工業学校開校に伴い、県立弘前中学校東奥義塾は1914(大正3)年3月に廃校となった。その後、米国メソジスト・ミッション(伝道教会)と東奥義塾再興を願う地元関係者の働きで、塾長に笹森順造を迎え、1922(大正11)年に再興となった。

明治初期の東奥義塾で学んだ著名人の中には、珍田捨巳(外務次官、駐米大使、侍従長、牧師)、佐藤愛麿(牧師、外交官、宮中顧問官)、陸羯南(ジャーナリスト)、伊東重(青森県医師会会長、弘前市長、衆議院議員)などがいる。また斗南藩でも、東海散士こと柴四朗(政治家、小説家)をはじめ東奥義塾に来て学ぶ者があったし、盛岡藩士族で弘前警察署に警部として着任した脇本義保は本多塾長の基督教伝道にふれて回心し、東奥義塾の助教となっている(山本, 1987)。註<sup>1</sup>

前述の島守(1996)では、開文学舎は「東奥義塾に対応して設立された」と記されているが、東奥義塾史関連の資料の中で開文学舎との関わりに関するものを見出すことはできなかった。註<sup>2</sup> 弘前藩の藩校から紆余曲折を経ながら1872(明治5年)に開学した東奥義塾の実情が、開文学舎が創立される翌年までに八戸地域に正確に伝わっていたか否か、そして誕生して間もない本県において南部地方の(「八戸町」になる以前の)八戸地域で学校を津軽地方の弘前の「東奥義塾に対抗して設立」という発想自体があったか否か、疑問が残る。



## 8. 八戸の洋学教育の若者たちへの波及効果についての考察

最後に開文学舎での洋学教育の受講した若者たちのへの影響について、地域の産業遺産と関連づけて考察したい。開文学舎は、蛇口伴蔵の子胤親とともに藩中第一の洋学者といわれた岩泉正意が設立した夜学である。この学舎で学んだり、岩泉から薫陶を受けたり、ルセーから洋学を学んだりした者の中からは、海外留学したとか、グローバルな外交官になった事例は確認されない。その一方で、その後、八戸地域の各界で活躍した人物がいることは既に知られているところである。

例えば、奈須川光宝は、1866（慶応2）年に藩学校で主に漢学を学び、その開文学舎で洋学を学び、1875（明治8）年に教員となった。1880（明治13）年に自由民権政治結社「暢伸社」を結成し、翌年の産馬騒擾事件では、せり市の完全民営化のため、後述の源晟らと共に産馬組合を発足させ、県との裁判に勝訴したが、これは八戸地域における自由民権運動の先駆けとなった。1882（明治15）年に県議となり、1888（明治22）年に憲政会系の政治結社「八戸土曜会」を結成した。翌年の第1回衆議院選挙で当選以降、長らく代議士を務め、引退後は、鮫村長、八戸町長を務めた。1918（大正7）年には「鮫漁港築港期成同盟会」を発足させ、超党派の運動を展開して築港実現に貢献した。

源晟は開文学舎が創設された1873（明治6）年のキリスト教解禁を契機に八戸に伝播したハリストス正教に傾倒し、1876（明治9）年には地元信者の中心となって「陸奥国八戸光栄会」を設置し、日本人最初の司祭沢辺琢磨から、八戸で初となる洗礼を受け、上京してニコライ司祭に学ぶ。伝道師として各地を巡り1881（明治14）年に帰郷し、翌年産馬委員となり、県内を揺るがしていた産馬騒擾事件を解決に導く。民衆の信望を集めた彼は、県会議員や同議長、さらに衆議院議員となり政界で活躍。また後述する同志の受洗者関春茂らと自由民権政治結社「八戸土曜会」を結成する一方、尋常中学校八戸分校の開設を図るなど教育界でも活躍した。

関春茂は開文学舎で自由主義思想に接し、1876（明治9）年に「陸奥国八戸光栄会」でギリシャ正教の洗礼を受けて、番町の蛇口胤親宅に置かれた青森師範学校八戸分校で学び、卒業後に教員となった。その後、各地区の教師長を務めながら自由民権政治結社「暢伸社」に参画し、政治の道へ進んだ。1887（明治21）年には県議に初当選し、翌年奈須川光宝と共に政治結社「八戸土曜会」を結成した。1904（明治37）年には国会議員に当選して1期務めた後、県議に戻り通算24年間務めた。この間、尋常中学校八戸分校（八戸高校）や第二高等女学校（八戸東高校）の誘致を成し遂げている。県議を退いた後は湊村長となり、1923（大正12）年に八戸町長に就任した。翌年の八戸大火の際に、罹災者の救済に努め、八戸町再建に尽力した。

遠山景三は、開文学舎で英学や民権思想を学び、1877（明治10）年に青森師範学校八戸分校の教員となって後進の指導にあたった。分校閉校後の1882（明治15）年、「相愛社」という相互扶助組織を設立するが、後に政治団体の公民会へと結集していく。やがて政界に進出し、三戸郡会議員、県会議員などを経て、1893（明治26）年に二代目八戸町長に就任し、八戸町政は15年に及んだ。

八戸地域では1890（明治23）年に町村制施行により三戸郡八戸町が誕生し、1929（昭和4）年の市制施行により八戸市が誕生した。この市制施行は、港湾の築港と町村合併による大八戸建設の動きが連動していた。開文学舎で学んだ若者たちの各界での活躍・動向は、近代八戸地域における町村合併と大八戸建設という動きを後押しする近代精神の系譜の一側面として捉えることができよう。

## 9. 終わりに

科学史の第一人者である村上は、科学革命以後の近代科学を絶対普遍とみなし、科学史を単線的進歩の過程と捉える硬直した歴史観と対決することを終生の課題ととらえており、以下のように記している。

自然科学は、けっして人間や人間社会から切り離された、中立の道具などではないのです。良かれ悪しかれ、その時代その社会の基本的なものの考え方、底流となっている前提と結ばれているものなのです。(中略) 17 世紀の人びとにとって、科学とは、この自然界の創造主たる神が、この自然のなかに自らのどのような計画を描き込んだのか、という点を、自然を研究することによって人間が知り、それを通して神のみごとな御業を讃える、という営みとして考えられていました。18 世紀の人びとにとっては、科学は、自然のなかに現われている秩序の追究という営みを指すことになって、造物主であり、創造主であり、かつ計画の立案者である神のことは棚上げにされ、故意に忘れ去りました。(村上, 1979, p.118)

村上は、この過程を「聖俗革命」と呼んでおり、17 世紀の人びとにとっての「科学」のもつ意味合いと、18 世紀の、とりわけ、啓蒙主義者たちにとっての「科学」のもつ意味合いとの間には、非常に重要な差があり、現在の我々は、18 世紀啓蒙主義者たちと同じように「科学」を考えており、我々の常識は、啓蒙主義的「偏見」や「先入観」の上に形づくられていることにもなると論じている。

我々が自ら暮らす地域における過去の歴史を振り返る場合も、単線的な進歩の過程と捉えることはできない。過去の時代に生きている人びとが身近で起きている出来事をどう捉えたのか、どう思考したのか、その時代と切り離して考えるべきではない。歴史はその時代に生きた人々の息吹を感じながら見つめるようにしたい。もし近代八戸地域で盛岡の日新堂のような教育が展開されていたならば、医学や冶金・製鉄中心の工学に精通する若者が数多く輩出されたかもしれない。また弘前の東奥義塾のような教育が展開されていたならば、異なる人物の輩出となっていた可能性もある。その時代の人々が洋学をどのように受容し、その後の人生にどのように反映させようとしたかによって、異なる展開が生まれることがある。歴史を振り返る際には、八戸が盛岡や弘前と同じ城下町ではあったが、海に面しており、漁業・水産業・工業が盛んな土地であり、内陸にある盛岡や弘前とは異なる点も留意したい。さらに、近代八戸地域において、人と人との遭遇・交流によって歴史が流れていたこと、その流れの中で新しいものを作っていこうという志を持つ先人たちがいたことは心に留めておきたい。

## 謝辞

本研究を行うに当たり資料提供に協力いただいた蛇口剛義氏、米国 Rutgers University 図書館 William Griffis Collection 担当 Fernanda Perrone 氏、八戸市立図書館歴史資料グループ滝尻侑貴氏、八戸工業高等専門学校図書館及び東奥義塾高等学校図書館担当者に謝意を表したい。

## 参考文献

- 1) 岩泉 正基：岩泉正意の英学ノートの英文原典について，国立八戸工業高等専門学校地域文化研究センター・地域文化研究第16号，pp. 120-124, 2007.
- 2) 大沢 泉：一 産業教育，明治半ば以降に本格化，第八部 人を育てる，北東北産業技術遺産学会（編著），みちのく「ふるさとの産業遺産」伊吉書院，pp.171～3, 2001.
- 3) 木村 克彦：発刊に寄せて みちのく「ふるさとの産業遺産」，（編著）北東北産業技術遺産学会（編著），みちのく「ふるさとの産業遺産」伊吉書院，pp.3～5, 2001.
- 4) 東奥義塾百年史編纂委員会：開学百年記念東奥義塾年表，東奥義塾，1972.
- 5) 中野渡 一耕：蛇口用水と三本木平開発にみる資金的・技術的援助について，会員研究発表，青森県文化財保護協会，東奥文化 (88)，pp. 31～49, 2017.
- 5) 八戸市史編纂委員会：新編八戸市史 通史編III 近現代，2014.
- 6) 廣澤 安任：開牧五年紀事（上・下巻），斗南藩記念観光村先人記念館，2000 復刻（1877 出版，新編青森県叢書（2），歴史図書社に所収，1973）
- 7) 廣澤 安正：活人劔，活人農，伊吉書院，2009.
- 8) 星 亮一：会津藩 斗南へー誇り高き魂の奇跡，三修社，2017.
- 9) 本田 敏雄：岩泉正意（1841－1909）と開文舎，日本英学史学会報 No. 54，pp. 4-5, 1988.
- 10) 本田 敏雄：盛岡日新堂へ留学した八戸藩の岩泉大七（正意），日本鉱業史研究 No. 31，pp. 11-20, 1996.
- 11) 本田 敏雄：四 八戸洋学校 青少年に科学ロマン啓蒙，北東北産業技術遺産学会（編著），みちのく「ふるさとの産業遺産」，伊吉書院，pp.180～2, 2001.
- 12) 村上 陽一郎：新しい科学論－「事実」は理論をたおせるか，講談社ブルーバックス，1979.
- 13) 山下 英一：グリフィスと日本－明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト，近代文藝社，1995.
- 14) 山本 博：ジョン・イングと弘前バンドー津軽の英学（その五）一，弘前大学教養部（編），文化紀要 (26)，pp. 1-33, 1987.

註 1) 東奥義塾と開文学舎との接点は見出すことはできなかったが，八戸地域の教育機関との接点は，洋学教育とは異なる点で見出すことができる。1893（明治 26）年に県下二番目の中学として青森県尋常中学校八戸分校（現八戸高校）が開校するが，その初代校長（正確には分校主任）は西館武雄である。西館は弘前出身で，本田庸一の弟である（東奥義塾百年史編纂委員会，1972，島守，1996）。なお，西館の県尋常中学校八戸分校での在職期間は翌 1894（明治 27）年 5 月までとなっており，1896（明治 29）年 6 月には本多庸一塾長辞任後，東奥義塾塾長となっている。

註 2) 脇本義保の回心について，著者の山本博氏は「いわゆる津軽と南部の対立関係を考えるとき，南部藩士でしかも警官であった脇本をもキリスト者に回心せしめた本多庸一の感化の強さと人格的影響の広さを知らされる」と論じている（p.23）。因みに山本氏は筆者が学生時代に弘前で英語を学んだ際の恩師である。氏の英会話及び英作文の講義は当時としては珍しかったオールイングリッシュ方式で進められ，高校時代に文法訳読中心の授業しか経験したことがなかった筆者にとって面食らうこともあった。但し，筆者はその講義中にコミュニケーション・ギャップによるミスで気まずい思いを経験したことが契機となって，英語習得に興味を持つようになった。